むかし、ある村に、くず屋のじいさんがいました。じいさんは、いくら働いても、貧乏ばかりしていました。

ある日、じいさんは、じつと考えていて、うまいことを思いつきました。じいさんは、仲良しのたぬきの所に行つて、

「おまえに、ぜひたのみたいことがあるんだが、聞いてくれないか」といいました。

「おまえのいうことなら、何でも聞いてやるが、いったい何だ」

「ほかでもない、ちやがまに化けてくれないか」

「なんだそんなことか。ちやがまに化けるなんて造作もない。いつでも化けてやる。それだ」

たぬきは、そういつて、もうすぐにちやがまに化けました。

じいさんは、「しめた」と思つて、さつそくちやがまをふるしきにつつんで、背負つて、お寺の和尚さんの所に持つて行きました。

「和尚さん、和尚さん。めずらしいちやがまを手に入れました。安くしとくから、買つておくんなんしょ」

「どれどれ、どんなちやがまだ」

和尚さんがふるしきを広げてみると、なるほど、いいちやがまです。

「いくらだ」と和尚さんがきくと、じいさんは、

「和尚さんのことだから、大まけにまけて、三両だ」といいました。

「三両なら安い」

和尚さんはそういつて、ちやがまを買いました。

和尚さんは、小僧さんに、

「小僧、小僧。このちやがまを川へ持つて行つて、ようみがいて来い」といつけました。

小僧さんは、和尚さんにいつけられたとおり、ちやがまを川ばたに持つて行つて、砂を付けて、ごしごしみがきました。すると、ちやがまが、

「小僧、小僧。痛い、そおとみがけ」といいました。小僧さんは、びっくりしてお寺に飛んで帰りました。

「和尚さん、和尚さん。ちやがまが、『痛い、そおとみがけ』といいました」

「そいじゃ、わしが行つてみがいてみよう」

和尚さんは、ちやがまを川ばたに持つて行つて、砂を付けてみがきました。すると、ちやがまが、

「和尚、和尚。痛い、そおとみがけ」といいました。

和尚さんは、これはふしぎだと、ちやがまをお寺に持つて帰つて、小僧さんに、

「小僧、小僧。ちやがまに水をいっぱい入れて、火にかけて、お湯をわかせ」といつけました。

小僧さんは、和尚さんにいつけられたとおり、ちやがまに水をいっぱい入れて火にかけました。

少したつと、ちやがまが、

「小僧、小僧。熱いで、そろそろ燃やせ」といいました。

そのうち、火がどんどん燃えて熱くなってきました。すると、ちやがまから、たぬきの頭がぬつと出ました。そして、足が、ちよんちよん、ちよんちよんと出ました。小僧さんがびっくりしているうちに、ちやがまは、太いしつぽを出しました。そして、あつというまに大きなたぬきになって、山のほうへぴよんぴよん逃げて行ってしまいました。

おかげで、和尚さんは、三両、そんなりましたとさ。

おしまい。

原話…『昔ばなし』岩崎清美／信濃郷土出版社
再話…村上郁